

## ライプニッツと美學

深田 康算

### 四

前節に於て述べた如く、ベーコンとホッブスとが想像力に關して説いてゐる所のものはそれぞれ劃期的とも呼ばるゝに價すると思はれる。ベーコンが想像力を詩(文學)に從つて藝術に對する特殊能力と見定めてゐること、及びホッブスが想像力の特殊作用は異なる物の間に於ける類似を觀取するに在ると指摘してゐることは共に「此の如き見解の萌芽が彼等の先行者の中に與へられてゐたに相違ないに

はしても、彼等に依りて始めて充分明確なる表現にまで持ち來たされたものとして」美學史考察の途上吾々の注意を惹いたのであつた。

想像力を詩に對する特殊能力として吾々の知識 Learning の一分野に配當することに依りてベーコンは、想像力をば唯誤謬の源泉としてのみ考へてゐた他の人々か

ら全く異なる立場に立ち、彼等に對して極めて明瞭なる對照を示してゐる。ホッブスは又同中に異を認める作用と異中に同を認める作用とを區別し之れを判斷力と想像力とに分屬せしめることに依り、兩者をば常に同一視し混同せる他の人々とは全く別な見地を開いてゐる。さうして兩者共に想像力(若しくは天才)なる概念に依り、藝術の特殊性の確立へ向つて重要な寄與をなしてゐると云へる。蓋し彼等は、想像力と天才との兩語を使用した多くの彼等の先行者達に於ては云はゞ暗らき表象 *dunkle Vorstellung* たるに過ぎなかつた所のものを明瞭なる表象 *Klare Vorstellung* にしたのであるとも云へるであらう。

しかしながら明瞭なる表象は—デカルトの用語を借りて云へば—必しもそのまゝ又判然たる表象 *deutliche Vorstellung* ではない。或表象が明瞭なる表象たるがためには其物の其物としての現前せる表象だけで充分であるそれがためには云はゞ唯其特殊性の指摘のみが必要なのである。しかしそれが判然たる表象たるがためには其物の他物に對する關係の表象が附け加はらなければならない、云はゞ其特殊性の指摘のみではなくして、全體の中に於ける其特殊性の規定をば必要とする。判然たる表象とは此意味に於ては即ち體系的基礎附けより他の何ものでもないであら

う。かやうに區別することが許されるとし、之れを今此場合に借り用ゐることが許される。依りて藝術に對しての特殊能力が如何なるものでなければならぬかを成程明瞭に指摘してゐる。之れを明瞭に表象してゐる。しかし彼等に依りては此能力は體系的に基礎を有する確固たる地位を與へられなかつた、即ちそれは彼等に依り判然たる表象にはされなかつたと云はなければなるまいと思はれる。

ペーコンは、前述(三)の如く、想像力を詩—藝術—に其特殊能力として配當してゐる。想像力は何等の法則に依りても束縛せられずして如何なる不自然的なる結合をも又分離をも己れの意のまゝに作る事ができるとしてゐる。さうして想像力を源泉とする詩は—歴史や哲學が爲す如くに心を物に従はしめるのではなく寧ろ—事物の姿をして吾々の情願に適はしめると説いてゐる。此等の諸點が藝術の特異性を指摘する上に於て意味深きものを含有することは先きに吾々の注意した通りである。しかしながら、それと同時に吾々が又注意して置かなければならなかつた所の二つの點—即ち彼が比喻詩(若しくは寓意詩) Allegorical poetry を最高と見做してゐること、及び抒情詩を詩の外に置いてゐること—此二點に就ての多少綿密なる検査

は忽ちにして又ペーコンの詩論に於ける根本的なる缺陷を吾々に向つて曝露せしめないでは置かぬであらう。先きに引照せる個處に於てペーコンは『サタイヤ、エペデー、エピグラム、オード Satire, elegy, epigram, ode 等を余は慣例に反して詩として之れを取扱はない。此等をば寧ろ哲學及び修辭學の部門に屬せしめ、詩の名の下には唯想像せられたる歴史 imaginary history のみを取扱ふ』と云つてゐる。さうして又『比喻詩は詩のあらゆる他の種類に優つて、神聖なるものとさへ思はれる』と云ひ、比喻詩を『神祕的』と『教訓的』とに分ち、神祕を包むものとしては神的なるものと人間的なるものとの交通のために宗教が廣く之れを取り用ゐること、眞理を例示するものとしては理性の結論と發見とが尙未だ人の耳に入り難かりし時代に於て此等の結論と發見とを傳播するために役立ちたることを説いてゐる。しかして古代の神話に關する彼一流の所謂比喻的寓意的解釋 allegorical interpretation (一例へば『知識の進歩』の中に於けるバン、ベルセウス、デオニスに關する説明及び『古代人の智慧』The Wisdom of the Ancients 参照)は即ち此見地からしての試みなのである。さうであるからして、ペーコンは、吾々から見れば最も(若しくは眞に)詩的なるものを哲學及び修辭學(即ち散文に屬せしめ、最も散文的なるもの、比喻的寓意的詩)を以て最も詩的なるものと

見做してゐるのである。詩は想像力を其源泉とすと云はれてゐるにも拘はらず、一方に於ては比喩詩が最高の詩とせられ、他方に於ては最も詩的なるものが哲學及修辭學に屬せしめられる以上、詩の源泉はつまりは想像力なのではなくして理性なのでなければならぬ。成程詩は極度に自由であり、何等の法則にも束縛せられず、如何なる不自然的なる結合をも分離をも意のままに作りうるであらう。しかし其詩の價值が比喩的なること、寓意的なることに在るのならば、自由なること、不自然的なること、其ことは其自らとして價值を有するのではあり得ない。詩は唯哲學への入門であり、想像力は理性の單なる道具たるに過ぎぬことゝならなければならぬ。或意味に於て詩は哲學の入門とも云へる、あらゆる吾々の能力は皆理性の道具であるとも云へやう。しかしさうであるにしても詩の獨立性、想像力の特殊性は何等かの仕方に於て確保せられなければならぬ筈である。ペーコンの所説に従へば、想像力は詩の特殊能力であるとせられるに拘はらず、詩は作爲的、空想的、歴史に他ならず、又哲學の比喩的表現に他ならないのであるからして、詩は詩として獨立性を有するものでもなく、想像力は想像力として其自身の領域を持つものでもない。想像力に依りて詩に附加せられる所のものは理性の結論と發見とを親しみ易からしめるた

めに纏はしめられる所の外衣に過ぎない。想像力に依りて詩に與へられる自由性と不自然性とは其自身固有の法則を含有するのでなく、云はゞ何等の根基なき單なる無法則性である。詩—藝術—の特殊能力として規定せらるべき想像力は少くとも理性と區別せられて、さうして其自らの法則を有するものでなければならぬ。さうしてそれがためには想像力の概念はペーコンに於けるとは全く異なりたるものでなければならぬことが明らかである。詩の特殊能力と見做されたる想像力の特殊性がペーコンに依りて指摘せられたとは云へるが、規定せられたと云へぬと吾々の云つたのは其故である。彼は想像力の自由性と不自然性を指摘した、しかし此自由性と不自然性との其自身に固有なる法則性を規定することは彼のなしえなかつたことである。此ことは彼が比喩的寓意的詩を以て最高の詩と見做してゐる點に於て最も明白に曝露してゐる。さうして此ことは畢竟彼が詩を以て想像せられたる歴史 *imaginary history* であると規定せる所に根ざしてゐると云へる。ペーコンが詩の文體と内容を區別し、文體を詩に取りて從屬的なるものと考へてゐることは、一見彼が詩を以て或内容に纏はしめられたる單なる外衣とは見做してゐなかつたことを示すやうに見えるけれども、—従つて想像力は詩の—外面的ならざる、寧ろ

―内面的なる原理とせられてゐるやうに見えるけれども、―しかし詩が想像せられたる作爲的空想的なる、しかして比喩的寓意的なる歴史とせられることに依り、それは畢竟唯歴史と哲學とに對する餘計なる何等必然的ならざる、之れを纏ふことに依りて内容が親しましめられると云へると同時に之れを纏ふがために内容が掩ひ隠される恐れのある、單なる外衣に過ぎぬものとなつてゐる。

詩が空想的歴史であるとペーコンの云ふのは、詩が世界及び人生の模倣的描寫であること云ふことに他ならない。詩とは即ち客觀的に與へられたる世界及び人生の姿の記述とせられてゐるのである。歴史は個體の事實あるがまゝを描寫する。哲學は個體から抽象せられたる諸觀念を自然の法則と物自らの實證とに従つて結合し分離する。感覺及び記憶と理性との與へる世界像は見出されたるまゝ *gefunden* の姿である。之れに反して想像力の與へる世界像は作爲されたる *erfunden* 姿である。感覺及び記憶と理性とは世界をあるがまゝに寫す所の忠實なる鏡であるが、想像力は世界を寫すと同時に之れを變形せしめる所の魔法的なる鏡であり、此鏡に寫し出されたる、作爲されたる世界及び人生の像が即ち詩なのである。詩が空想的作爲的なるにせよ歴史であるとせられる所に、詩は叙事詩(英雄詩)劇詩若しくは比喩詩

の三種、しかして此三種のみとせらるゝ根源があり、抒情詩が當然除外されなければならぬ所以が潜んでゐる。抒情詩は世界及人生の記述ではない、空想せられたるにもせよ歴史ではないからである。此除外は、彼の見地からしては極めて當然であると共に、それは上に云つたやうに、ベーコンの詩論に於ける根本的なる第二の缺陷とも云ふべきものである。詩に對する特殊能力としての想像力に關する彼の規定が如何にして破綻を來たさなければならぬかは此所からしても觀取せられるであらう。

—空想的作爲的なるが故に詩は一方に於ては歴史及び哲學から區別せられ、此兩者の恰も中間に位する地位が配當せられる。さうして詩は恰も此の如き中間の地位に於て其自身に固有なる領域を獲得確認せられ、たかの如くに見える。しかしながら他方に於て詩は史であるとせられ、詩は叙事詩か劇詩か比喻詩かであるとせられ、従つて歴史及び哲學と同じく世界の摸倣的描寫に他ならぬものとせられる。詩を歴史及び哲學から區別せしめる所の空想性作爲性の根源としての想像力は、さうであるからして、つまりはやはり摸倣的描寫の能力に屬するものたるに過ぎない。

記憶と理性とに對して想像力が獨自の能力であるかの如くに説かれてゐるに拘はらず、實は何等の獨自性をも有するものでありえないとは、詩が史であるとせられ、抒



情詩が詩の外に置かれることからして明らかである。加之抒情詩が哲學及修辭學に屬せしめられることからして已に明らかである。成程、詩は空想的作爲的なる點に於て歴史と哲學とから區別せられ想像力は記憶と理性とから分類されてはゐる。しかして想像力が世界のあるがまゝの姿をではなく、空想せられ作爲せられたる世界像を作り上げるのは、事物の姿をして吾々の情願に適はしめんためであると云はれてゐる。現實以上の『偉大さ』と『完全なる秩序』と『美しき變化』の希求に適はせんがためであると云はれてゐる。想像力の空想性作爲性は物をして吾々の心に従はしめる所の原理からして生ずるとせられてゐる。しかしながら、詩が何處までも史である限り、さうして抒情詩が何處までも詩から除外されてゐる限り、『空想せられた史』の空想は唯單に史に附け加へらるゝ添加物に過ぎない。此場合史は想像力に依りて變形せられるとは云へても、それに依り史が詩になるとは云はれない。空想せられたる史は史としては遂に價値なきものであり、しかして之れを詩たらしめる原理は何處にも見出されないのであらう。此の如き原理は史の中になくして空想の中に見出されなければならぬ。しかるに其空想は史に従屬せしめられることに依りて自己固有の立場なきものとせられる。此場合詩の空想性

作爲性は畢竟唯單に「若し此の如き事が可能で、ありうるとするならば」史を一部分詩に、物を一部分吾々の心に従はしめること以上のものではありえないであらう。云はゞ與へられたる世界像の情願に従つての部分的變改であつて「抒情詩に於て——さうして實はあらゆる詩に於て——さうである如き」情願若しくは吾々の心意に依りての新らたなる世界像の創造ではありえない。而して抒情詩に於て特に著しく注意される所の此「情願に依れる世界像の新らたなる創造」の原理なくしては、空想性作爲性の根源はありえない。此の如き原理に従つての創造は成程『空想せられたる史』とも呼ばれうるであらう。物が心に従はしめられ、世界像が情願に従はしめられるのだとも云ひうるであらう。しかし嚴密には、それは詩であつて史ではない、空想であつて事實ではない、心に従つて情願に適ふ様に物と世界像とが變改せられるのではなくして、心に依り、情願に依りての物と世界像との創造なのである。ペーコンは詩は史を吾々の情願に適はしめんがために、物を心に従はしめんがために改造すると云ひ、そこに想像力の空想性作爲性を認めようとする。しかし心に依り情願に依りて物と世界像とを創造する詩の力を「抒情詩を除外することに於て」見定めぬがために、此改造の必然性を規定することを彼はなしえない。此改造は唯

彼創造に依りてのみ可能であり、しかしして此創造を認めることは、詩を以て改造と見做さぬこと、換言すれば詩を以て『空想せられたる歴史』と見做さぬことでなければならぬ。抒情詩を詩から除外することは、さうであるからして、如何に他方に於て想像力を高調し想像力の空想性作爲性を高調しようとも、遂に詩の特殊能力たるものゝ規定をば不可能ならしめるものと云はなければならぬ。叙事詩や劇詩や比喩詩に就ては或は尙與へられたる世界像の情願に依れる(想像力を通しての)一部分的改造を云ふことも常識的には許されるであらう。抒情詩に就ては常識的にさへもさう云ふことは許さるべくもない。此所では想像力は心意の獨裁的支配の下に新らたなる(歴史及び哲學と異なる)世界像を創造するのである。ペーコンの如き意味に於て想像力を詩作の能力と見做す者に對しては吾々はあらゆる詩が情熱を根基とするを指摘し心意若しくは感情の詩に於ける優位を説くべきであらう。恰も此の如き心意若しくは感情の獨自性の規定に依りて始めて詩は其固有の領域が確立せられうるのである。想像力を指導する此の如き原理が(想像力の中にか若しくは想像方の上にか)規定されえない限り、想像力の空想性作爲性の根據は唯單に空に懸かれるものたるに過ぎない。しかるに此根據を基礎附けうる唯一可能

の途は詩を世界及び人生の摸倣的描寫とし、詩から抒情詩を除外し去ることに依り（「クローノ・フィッツシャールの言葉を借りて云へば、詩を唯『世界の鏡』 Spiegel der Welt と見倣し、之れを『人間の魂の鏡』 Spiegel der menschlichen Seele とは考へざりしことに依り K. Fischer, Geschichte der neueren Philosophie, Bd. X, 1923, s. 187.））ベーコンに取りては閉ざれてしまつたのである。抒情詩の除外は、かくして、ベーコンの詩論に於ける致命的缺陷であると云へやう。抒情詩に於て――さうして實はあらゆる詩に於て――想像力を生命附ける所の心意若しくは感情が詩に對する特殊能力なのである。抒情詩の除外は、しかるに、此の如き特殊能力を否定し去らしめ、想像力の空想性作爲性をば唯吾々の單なる主觀的イドラの所産たらしめる。（未完）